

サリュ
Spiritual

VOL 7 2013 Summer

「果たして、
仏教寺院の

商品とは何か。」松本紹圭さんは、「未来の住職塾」受講生にそう問いかけるという。お寺の跡継ぎではないが、祖父が住職をつとめるお寺が近所にあり、幼少期からお寺は身近な存在だった。しかし学生時代に目にした新宗教やスピリチュアルブームと友人との対話が、改めて「伝統仏教が頑張るべき」という思いを駆り立てた。そして、「いつかはお坊さんに」との内なる声に従い、「赤門」(東京大学)から「仏門」に入った。

僧侶となり、本山の職員を勤めた後、仏教が生まれたインドのハイデラバードにある「Indian School of Business」に留学した。そして2011年の春に経営学の大学院を修了。帰国した後、急速に環境が変化する現代社会の「超宗派の僧侶養成プログラム」を開始した。それが「未来の住職塾」である。

「経営学ではリーダーシップ論がよく語られます。ただ、そもそもリーダーとは周囲をよい方向へと導く人のこと。そう考えると、お寺は住職が「縁」を結ぶ役となり、みんなの願いと仏の願いを統合する場です。未来の住職塾が受講生に期待しているのは、「縁」となる人の自覚、住職の

目覚めです。」

2003年9月、松本さんの個人ブログとして開始した「彼岸寺」は、2004年3月にネット上の「仮想」寺院に!

2012年から始まった「未来の住職塾」は
2013年4月開講の第二期より大阪でも開催(於: 應典院)
<http://www.oteranomirai.or.jp>

浄土真宗本願寺派布教使・34歳
超宗派仏教によるインターネット寺院「彼岸寺」開基
一般社団法人お寺の未来 代表理事
未来の住職塾 塾長

松本 紹圭さん



(写真：カマン!メディアセンターにて・2012年7月15日／写真提供：陸奥賢<P.6も>)

い手になっていった。そこでは「隣に誰が住んでいるかわからない」(犯罪者かも知れないが天才かも知れない)という社会状況が生まれるが、じつはこの無縁性こそが都市の都市たる基礎条件となる。そういう都市で自然発生する祭礼は、無縁ということにそれほど頓着しない。むしろ、みんな同じような無縁の存在であるからでこそ、お互いに供養しあおうという慈悲の発想が誕生するといえないだろうか？

大阪七墓巡りが発生した社会状況は、「隣に誰が住んでいるかわからない」という戦後日本の社会状況と非常にリンクしている。

ご存じのように大阪は、安土桃山時代には天下人・秀吉が「浪華のことは夢のまた夢」と謳ったほどの栄光を誇る豊臣武家政権の首都であったが、慶長の役(1615)によって、すべてが灰燼と化してしまう。当時の様子を伝える古文獻によれば「大坂にこもりたる衆は、命ながらへたる衆は、ことごとく具足をぬぎ捨て、裸にて女子もにげちる」(大久保彦左衛門『三河物語』)、「多くの人は約10万人が死んだ」と言い、町の中で殺された人々のほか、合戦が行われた周辺も死体で埋まっていた。大坂の川(大川)は水が豊富で非常に深いだけに、敵の武器や火事を免れようとした多くの人々のために、かえって墓場と化した。川底は死体で埋もれ、向岸へ渡ろうとすれば、その上を歩かねばならないほどであった」(『切支丹研究第17集 耶蘇会史料』)とあり、つまり戦闘員だけではなく大阪城周辺にいた非戦闘員(町衆・女・子供)も惨殺されたことが記述されている。どこまで事実であるかはわからないが、当時の伝聞では約10万もの人々が殺されて(ちなみに太平洋戦争時の大阪大空襲の死者・不明者数は約1万5000人)、まさに大阪のまちは、どこを歩いても血で汚され、累々たる死者が眠る「ネクロポリス」(死者のまち)となってしまった。

こうして完全に焼野原、焦土と化した大阪を再建するために、新しく日本全国各地から集団就職のように町衆が集まってきたが、その構成員の多くは、長い戦乱によって主君や土地を失った武家出身者(豊臣方が多かっただろう)や関係者、御用商人、農民など、つまり敗北者であり、流れ者であり、無縁者であったろう。実際に、元禄期にあまりの財力に幕府が恐れを為して關所払

歴史を紐解き、つながり断絶とのあいだを見る。
累々たる死者が眠る(ネグロポリス)大阪……

いされたという伝説的な大阪豪商の淀屋(信長に滅ぼされた岡本家の子孫)も、近代まで財閥として現存してきた住友家(秀吉に滅ぼされた柴田勝家家臣の子孫)や鴻池家(毛利氏に滅ぼされた山中鹿之助の子孫)も、元は武士の一族であった。こうした無数の無縁者たちの懸命の働きによって、元禄期に向けて大阪は商業流通都市「天下の台所」として劇的に再生していく。文字通り何もかも無に帰した慶長の役から、「浮世」と謳って浮かれ騒いだ元禄バブルという狂瀾の時代に至る、その成長のダイナミズムは、じつは戦後の高度経済成長を遙かに凌駕する規模とエネルギーであったのかもしれない。

七墓はなぜ消滅したのか

しかしここで忘れてはならないことは、江戸幕府の「士農工商」という絶対封建社会の身分制度では、町衆は、ほとんど最下級の人間として扱われていたという事実だ。仮に商人＝町衆が武士の刀に触れたりすれば、問答無用で「切り捨て御免」をしても許されるという法律(『公事方御定書』71条)ができたほどである。どれだけ富を蓄積しようとも、本質的には大阪とは、歴史的敗北者、社会的弱者が集積する悪所であり、アジール(無縁所)の都市であった。そして敗北者、弱者の最たるものが誰にも供養されない死者＝無縁仏(当然、この中には豊臣の死者が入る)であるので、自然とそこにシンパシー(同情)やエンパシー(共感)が生まれたであろう。そういった意味でも、大阪七墓巡りという祭礼が無縁仏の供養として起こったとしても、何ら不思議ではない。また、七墓に数え上げられる野江墓地(ここには置き場・刑場もあった)などは、豊臣の残党を処刑した場であると伝わる。じつは七墓巡りには、こうした「豊臣方の遺恨」「非戦闘員の大量虐殺」といった、「ネクロポリスの記憶」を密かに伝えていったのではないか。

ところが、時代が経るにつれて、こうした記憶は薄れていったようだ。前述した『郷土研究 上方』(編者 南木芳太郎)の「上方探墓號」の表紙に描かれた「大阪七墓巡り」を描いた錦絵(作

者・三代目長谷川貞信)では、男女が笑顔で鐘や太鼓を叩きながら巡礼している光景が描かれていて、とても陽性で自由闊達な雰囲気を感じとることができる。また幕末には、市中に「七墓道」(南浜墓地近くの源光寺境内に現物がある)の石標が立てられるほど、数多くの町衆が七墓を練り歩いたと思われるが、明治維新以降は都市の近代化が進み、七墓そのものが市中郊外に移ったり、統廃合され、いつのまにか大阪七墓巡りは自然消滅してしまったという。

ここでの疑問は、元禄期から明治初期にかけてまで約170年間ものあいだ行われていたという「伝統」ある大阪七墓巡りが、なぜいま、これほど綺麗さっぱりと見事に、この地上から雲散霧消して何も伝わっていないのかである。

長年、同じような習俗や祭礼を繰り返していれば、そのうち所作や決まり文句、踊り、歌、調子といったエトス(型)が生まれ、コミュニティとして継承されていくもののだが、大阪七墓巡りでは、どの順番で七墓を巡り、どのようなスタイルで死者を供養していたのかがまったく伝わっていない。しかし、これは近松の時代からすでに「八墓」が記載されているように、創成期から墓地の場所も完全には特定できず、要するに大阪七墓巡りをやっていた個人や団体が、それぞれ「無手勝流」であり「無定型」であったからだろう。少し穿った言い方をすれば、大阪七墓巡りは、大阪人気質の「なんでもよろしいがな!」という「いっちょかみ」(なんでも参加する)の「いちびり」(お調子者)精神で実施されていたため、エトス化されるほどまで祭礼が深まらなかったのではないか。また、仮に大阪七墓巡りの中に「豊臣方の慰霊・供養」といった隠された意味付けがあったならば、江戸時代の徳川政権下という抑圧の中では、そのような祭礼の執行は難しく、だからこそ「無手勝流」「無定型」といった非公式的な供養の方法論で、幕府の目を掻い潜ったのかも知れない。しかし、逆説的に考えると、無手勝流、無定型に大阪七墓巡りをやっても、それが「供養の祭礼」として成立しえたほど、往時の大阪人は深い宗教性を持ち、超自然的なもの(神仏や死者の霊)を敏感に感じ取る靈性に満ち溢れた民であった証明・証拠ではないか。

死生観光プロジェクト

以上、大阪七墓巡りという祭礼の存在意義や成立背景、その消滅について極私的な考えを述べたが、筆者は宗教や祭礼の専門家ではなく、普段は「コミュニティ(＝まち・都市)ツーリズム」のプロデューサーとして活動している。金儲け主義、経済効率最優先の「マス(＝大衆)ツーリズム」を否定して、まちの「ひと」(ガイド)との一期一会を楽しむ――要するに「まちの物語」(ナラティブ)を体感しようと2008年より活動したわけだが、次第に現在進行形の「生者のみの視点」でまちを語ることの不具合、不都合にも気付くことになった。

その最大のきっかけが2011年3月11日の東日本大震災である。まち歩きのプロデューサーとして普段から「まちはなに

か？」を考える日々、津波で一瞬のうちに流されてしまい、「ひとはいるがまちがない」といった事態や、原発事故によって強制的に退去させられて「まちはあるがひとがない」といった、まるで怪談のようなまちが発生したとき、改めて「まちとひと」との関係性について熟慮せざるを得なかったのだ。とくに数千年後、数万年後にまで影響を及ぼすという途方もない放射能汚染は、我々が住んでいるまちを、現在進行形の、生きている者たちだけのトポス(場)として捉えてはいけないという警鐘のようにも感じられた。

まちには我々が存在する以前に、そこに根差して生きてきた「まちの先人たち」がいて、さらに、その後には、いまだ生まれてはいないが、そのまちで生きていく「まちの後人たち」がいる。我々は、ただ、その両者のあいだに、つかのま存在しているだけのまちの仮の住人に過ぎない。それまでは観光というものは、「まちとひととの関係性(空間軸／横軸)」を体感するものと考えていたが、今後は、それだけではなく「まちとひとの連続性(時間軸／縦軸)」にも着目しないといけなだろう。つまり「死者と生者の交流・交感としての観光(これを筆者は「死生観光」と名付けた)」があるのではないか？という問いが芽生えたのである。そして、そのひとつの答えとして「死生観光プロジェクトとして大阪七墓巡りを復活させよう」と決意した。

まずfacebook上で公式ページ(<http://www.facebook.com/osaka7haka>)を作成し、2011年8月15日の夜に試験的に大阪七墓巡りの跡地を約6時間かけて訪ね歩くというまち歩きを企画・主催したところ、即座に様々な反響が寄せられ、30名近い人々が集ってきた。宣伝・告知はほぼfacebookのみであったので、20代～40代の参加者が多かったが、若いインターネット世代が大阪七墓巡りに多大な興味・関心を覚え、こぞって参加したというのは予想外の驚きであった。この成功を受けて2012年は公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団の後援と助成を受け、さらにプロジェクトを拡大し、まず七墓それぞれの歴史やドラマを語って体感するトークイベントを計7回企画した。

またプロジェクトのハイライトの8月15日には、詩人や舞踊家、コリオグラファー、ダンサー、劇作家、ミュージシャンといった7組のアーティストに協力と呼び掛け、七墓の跡地で供養のパフォーマンスを繰り広げ、それをまち歩きで繋いでいくという企画を実施した。ここでアーティストに供養のパフォーマンスをお願いしたのは、かつての大阪七墓巡りの「無手勝流」「無定型」という部分に着目したためだ。また、仏教やキリスト教、イスラム教といった制度宗教がなかった太古の時代(自然宗教の時代)には、ひとが亡くなったさいは歌や踊りによって、その離別の悲しみや再会の願いなどを表現していたに違いない。つまり、アートには本来、ひとを供養するといった根源的な力があるはずである。そこで、そういったベクトルのアートを実現できないか、という思いから決行した。

いま日本全国各地のシャッター商店街、限界集落などでアート・イベントが繰り広げられているが、その多くでアートは経済活性化や集客効果という「まちおこし」のためのツールとして使

われている。「かつての栄光よ再び」というコミュニティの切実な願いは判らないではないが、それは戦後日本社会の国是であった高度経済成長の幻想であり、まずそこを捨て去る必要があるのではないかと。朽ち果てていく、枯れ果てていくコミュニティへの供養——その時にこそアーティストの役割があり、つまり「まちしずめ」のアートが必要だろう。

しかし「無縁の死者を供養する」「まちしずめ」といったようなことは、アーティストも普段、なかなか求められない難題である。7組のアーティストはとても真摯に、誠実に、このテーマに取り組んでくれたが、とても一朝一夕にできるようなことではなかったという反省の声も聞かれた。試みとしては面白いものだったが、総評としては、アートによる供養はかなり無謀な挑戦で、むしろ制度宗教の持つ「エトス」(型)の必要性、重要性に気付かされた。しかし、宗教者とアーティストのコラボレートによる新しい供養の形の可能性も感じた。2013年度以降は、そうした供養の在り様を模索したい。

いずれにせよ、2012年の8月15日は、朝10時から夜24時まで七墓を巡り、各墓地でアーティストの供養のパフォーマンスを鑑賞するという、約14時間にも及ぶ「死生観光」のまち歩きだったが、50名近い参加者が入れ代わり立ち代わり参加して、大盛況のうちに終わることが出来た。今後もこのプロジェクトを実施し、やがて大阪のまちのひとたちに伝播し、自然発生的に大阪七墓巡りを行うようになるまで、要するに都市祭礼として完全に定着、復活するまで継続していきたいと願っている。

宗教と観光の視座

さて、筆者は「死生観光」を観光の新しい可能性を探り「大阪七墓巡り復活プロジェクト」を企画・主催してきたが、2012年10月13日に應典院にて、宗教者側から観光をどう捉えるべきかの講演があった。それは「第2回ものがたり観光行動学会」における釈徹宗さん(僧侶・宗教学者・相愛大学教授)の基調講演で、演題は「社会と宗教の位置関係……そして観光」であった。

釈さんによれば、そもそも日本仏教だけに限っても二十四輩、十八檀林、唱題目行脚といった宗教ツーリズムが数多くあり、こ

れらは教団の維持やコミュニティの帰属意識を高めるものとして定期的に繰り返されてきたという。平たく言えば「聖地」の巡礼である。例えばキリスト教徒は、エルサレムにある「ヴィア・ドロローサ」(苦難の道)と呼ばれるキリストが十字架を背負って歩いた最期の道を涙しながら歩き、キリストが罵声を浴びせられながら転んだという場では同じように転んで地面に祈りやキスを捧げ、キリストの悲しみや痛み、辛さを追体験し、コンパッション(共苦)しようとする。つまり、キリスト受難の地という場(トポス)が持っている物語(ナラティブ)に全身全霊を投じることで、キリストと自分の境がなくなるようなコミュニティ(融即状態)が生まれ、そこから日常へと回帰し、再生しようとする力を得るといふ。

釈さんは、社会基盤そのものを揺るがされるような未曾有の震災を経て、いま日本全体に、そうした場の物語への回帰現象が起きていると述べた。そして思想家・宗教学者の中沢新一氏の『アースダイバー』『大阪アースダイバー』といった出版物の刊行や「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「神戸外国人墓地ツアー」といったツーリズムも、その流れの中に位置づけできると説かれた。また、とくに大阪は聖徳太子一族の滅亡や左遷された菅原道真公、豊臣政権の崩壊など、数多くの悲劇を求心力に発展してきた都市であり、もともと大阪人はそうした歴史の敗者・弱者に対して自然とコンパッションを寄せる霊性があったのに、近年はそれが弱体化してしまっていると警告した。そして、経済的な意味を示唆して大阪は「地盤沈下」と語られるものの、じつは、こうした大阪の霊性の低下現象こそが問題だと指摘した。講演は、「自分のためだけでなく、他者を思いやるからこそ生きていける」という経典『スッタニパータ』の慈悲を思い起こし、大阪の霊性を呼び起こす場の物語へ身を投じるようなツーリズムを大切にしようともめられた。

ひとつひとつに深い見識と知恵がある釈さんの言葉に、筆者は文字通り圧倒されたが、宗教者側からの観光の意味づけに色んな発見があり、今後の「大阪七墓巡り復活プロジェクト」の方向性にも非常に多くの示唆を得た。改めて釈さんの素晴らしい講演と、こうした場に参加する機会を与えてくれた應典院の秋田光彦住職に感謝の意を表して、この稿を終えたい。

「死生観光プロジェクト」は、市井の人々に支えられ、伝承されていく。



(写真:アーティストによる即興ダンスを通じた供養)

日本人の死生観を読む

—明治武士から「おくりびと」へ—

「死生観について書くことを目指したのではないさまざまな文章やテキストから、人生の歩みから、あるいは芸術・技芸・造形物などから」近代的「日本人の死生観」を読みとろうとする本書に登場するのは儒教・武士道の立場にある加藤咄堂、民俗学・神道の柳田国男・折口信夫、仏教やキリスト教、教養主義の宮沢賢治(「ひかりの素足」)、志賀直哉(「城の崎にて」)、終戦間際「戦艦大和」に乗り込んでその最期を見届けた吉田満、「がん」闘病で死と対峙した岸本英夫、高見順……。それぞれが感じとった死生観に共通するものは、肉体消滅の後にまぎれもなく存在する「自らの生の全体と大きな世界(宇宙)そのもの実在性」への願望ないしは不変の「生の元型」への目覚めではなかったのか。

島蘭進 著

●朝日新聞出版(2012年/1,400円+税)

思想の身体

—死の巻—

「新しい思想史、文化史、精神史への手応えある展望」を全九巻にまとめた「死の巻」には五つの論文と対談を収録。宗教学、象徴人類学、哲学、社会学、医学など様々な角度から現代と将来の死と生のあり方を探究する。先祖の存在とその接し方、家から近親追憶的祭祀という葬送習俗の変化、「死者の側の主導権を尊重する」その絆の再生。葬儀・墓・仏壇という文化の継承の断絶がもたらす「死者へのまなざし」の喪失。学徒兵の愛国精神と死の超克。環境変化による宗教的倫理的「共生」への目覚め、それを契機とした「五種無我」の自覚から、生死の基底にある祖霊信仰は甦るのか。今こそ医療システムが信じる肉体死(延命観)のみ見つめる物質科学観を脱し、もっと豊穣な霊性を感得したい。

中村生雄 編・著

●春秋社(2006年/2,000円+税)



石井光太 著

●新潮社(2011年/1,500円+税)

「物乞う仏陀で「貧困の生の悲」を直視した著者は、仙台市釜石地区で大地震に生き残った「二百名以上の被災者」と三月月夜食を共にし、現場の「死の悲」の模様を伝える。絶えず遺体と呼び掛ける民生委員千葉淳のトーンが本書の主旋律となっており、にも生々しい。混乱の中で活動する市長・市職員、消防団員、陸上自衛隊員、海上保安部員、医師、歯科医師、住職、葬儀社員たちの息遣いが、著者の私情を抑制する。「突如襲った」多くの無念の死、原形を留めぬ遺体「身元不明の遺体」、苦しみもがいた姿を留める遺体。独りで死んだ幼い子、生まれて百日目に死んだ子、酒酌み交わした仲間との別れ。「遺体」に残る人格を再認識させてくれる本書は環境再生の進む今、再読の必要がある。

遺体

—震災、津波の果てに—

魂にふれる

—大震災と、生きている死者—

「生者は死者と毎日を生きている」「このことは、学説の真偽とは別な次元の事実として認識しておかなくてはならない」と柳田(国男)もまた警鐘を鳴らす。大震災後、被災者のために多くの著作が世に出たが、そこに欠落していた視点は、「死者からの語りかけ」(ミニニオン)超自然的な世界との交流)だった。本書は哲学者、宗教者、文芸評論家、民俗学者など真摯に死を直観体験した事例を紹介しつつ、魂の実相、その霊性を見つめることで、生者と死者が永遠に交流する「協同生命(魂)のメカニズムの実在性」に気づかせてくれる。肉体次元の生が終わっても「決して滅びない霊性」の働きがそこから始まる。「人は死なない、むしろ死ぬことができない」事実を本書は静かにしかし熱っぽく語る。

若松英輔 著

●トランスビュー(2012年/1,800円+税)

非営利組織・お寺の マネジメントを考える

「未来の住職塾」の取り組みから

取材・文 杉本恭子

日本仏教の“現在”を見通すために、各領域で活躍する僧侶を招いて開かれる「お寺MEETING」も4回目を迎えた。今回のテーマは「お寺のマネジメント」。ゲストに、超宗派インターネット寺院『彼岸寺』を創設し、2012年には僧侶育成プログラム『未来の住職塾』を開講した松本紹圭さん、経営学の研究者であり学生とともにお寺のマネジメントをリサーチしている大阪市立大学の山田仁一郎さんを招いて行われた。



33歳の僧侶が問いかける 「100年後のお寺の未来」

「感度が高くておしゃれ。だけど、何がやりたいのかよくわからなかった」。まずはじめに、ゲストの紹介に立った應典院代表・秋田光彦さんは、松本さんとの“出会い”を振り返った。秋田さんが松本さんの名前を知ったのは、松本さんが初めての著書『お坊さん、はじめました』を出版した2005年のこと。「東大卒で、都会のお寺でカフェを開く。“インターネット寺院”と銘打ったウェブサイト『彼岸寺』も話題になっていて。そして、2010年にはインドでMBA留学。表層的には見えていなかったせいもあるが、文脈がよく理解できなかった」。

秋田さんの関心が強まったのは、松本さんが『未来の住職塾』を始めたときである。従来の宗派内研修にはないテーマの人材育成プログラム、そしてパンフレットに書かれていた次のような言葉に「若干33歳の一介の僧侶がこんな問いかけをするのか」と衝撃を受けたと言う。「未来の住職塾は、急速に環境が変化する現代社会におけるお寺の役割や運営を専門に学ぶ、超宗派の僧侶育成プログラムです。都市と過疎地、寺院の規模、地域の特性など、寺院のあらゆる状況とその変化に柔軟に対応し、これからのお寺の100年を切り開く、寺院運営力を身につけます(第一期 未

来の住職塾パンフレットより)」。

経営理論、マネジメント、マーケティング。ビジネス用語が踊る『未来の住職塾』のパンフレットに対して、「お寺が経営を学ぶなんて。金儲けを学ぶのか?」と批判する人もいれば、「お寺も大変だからサバイバルだね」と同情の目を向ける人もいる。まずは、松本さんの立ち位置を確認するために、松本さんによる『未来の住職塾』の中間報告が行われた。

埋もれた宝の山を探しに 東大から“仏教界入り”

松本さんはお寺生まれではなかったが、母方の実家である真宗大谷派の寺院に親しむ幼少期を送った。「死ぬのが怖い。人は死んだらどうなるのか?」と不安に思い、祖父から仏教書を借りることもあり「いつかお坊さんになりたいな」と漠然と考えていたそうだ。

もうひとつ、お坊さんになろうと思ったきっかけはオウム真理教事件だった。「なぜ、こんなに優秀な人たちが、あやしいものに惹きつけられて事件を起こしてしまったのか」。松本さんは東京大学で同じクラスにいた小池龍之介さんと、「もっとお寺や仏教ががんばらないといけない」と語りあっていたという。

やがて大学卒業が近づくと、進学や就職を意識するようになる。さまざまな選択肢があるなかで「一生をかけて本気でやれることは何だろう?」と考えた結果、お坊さんを選択。「コンテンツの時代に、伝えるべき本当の価値のあるものは仏教に違いない」。松本さんの目は仏教界は「コンテンツの宝の山」に映った。出家して仏教界に飛び込んだのは、その「宝の山」を発掘し「お寺を変えるため」だったのである。

お寺カフェ、ネット寺院、 そしてインドでMBA留学

大学卒業後、都心のお寺で住み込みを始めた松本さんは、毎日多くの人々が街を往來するのにお寺は閑散としていることに気づいた。「街を見渡すとカフェはにぎわっている。カフェが持つ“やすらぐ場”という機能をうちの寺に取り入れられないか?」。人の流れを

“発心”をモチベーションにしたお寺を変えるという取り組みに共感。しかし、孤軍奮闘になるのでは?



應典院
秋田光彦住職

浄土宗・大蓮寺住職・應典院代表。1955年大阪府生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。97年、大蓮寺塔頭・應典院を、NPOを若いアーティストの拠点として再建。著書に「葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦」(新潮新書)。近著に釈徹宗氏との共著で「仏教シネマ〜お坊さんが読み説く映画の中の生老病死」(サンガ)。



住職以上に自分のお寺を知る人はいない。何のためにその寺院があるのか、問いなおすことが重要。

彼岸寺
松本 紹圭さん

浄土真宗本願寺派光明寺僧侶。蓮華寺佛教研究所研究員。米日財団リーダーシッププログラムフェロー。東京大学文学部哲学科卒業。超宗派仏教徒のウェブサイト『彼岸寺』を設立し、お寺の音楽会『誰そ彼』や、お寺カフェ『神谷町オープンテラス』を運営。2010年、南インドのIndian School of BusinessでMBA取得。著書に『お坊さん革命』(講談社)他多数。

秋田さん・松本さんの活動は、先祖から引き継いでいる価値を見つめ直し、再生を図る運動。資本主義に抗う上で必要な取り組み。



大阪市立大学
山田 仁一郎さん

大阪市立大学大学院経営学研究科准教授。北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。専門は経営戦略論。文部科学省科学技術政策研究所・客員研究官なども勤める。学生たちとともに日本のソーシャルキャピタルの問題に取り組むうちに、お寺マネジメントに関心を抱くようになり、松本さん、秋田さんに出会う。

呼び込むために、本堂二階の広縁スペースを“お寺カフェ”というコンセプトで『神谷町オープンテラス』と名づけた。

「東京の街なかではお寺参りの習慣がない。人々のなかにある要素にリーチしないと、人の流れを作るのは難しい。でも、お寺に来るようになれば、その人たちのライフスタイルにお寺が入り込めるのではないかと思った」。

『神谷町オープンテラス』は、あくまで“オープンスペース”。訪ねてきた人に無料でお茶を出し、お参りをしてもらおう。悩みがあるとわれればお坊さんが話を聴く。ごく一般のお寺が日常的にしていることの見せ方を変えただけである。しかし、表現次第で「斬新な取り組み」に映るし、お寺がやってきたことの意味を再発見してもらえる。松本さんは言う。「何をやるかは問題ではない。それぞれのお寺にできること、ぴったり合うことをやってお縁を作ればいい」。そして、大切なのは「人に来てもらう」ことを目的にしすぎないこと。「来てくれた人に『どうなってほしいのか』を考えておかないと先が続きなくて、目的を見失ってしまう」からだ。

また「お寺に来てもらう」だけでなく、「人がいるところにお坊さんが出ていく」必要も感じ、「今の時代に人が集まっている場であるインターネット」上の“お寺”として、2004年には超宗派の僧侶仲間や仏教に関心を持つ人たちと一緒に『彼岸寺』を開設。これまでにないポップな語り口で仏教を伝え、若い人たちの共感を得た。スマートフォンの普及がはじまると、坐禅アプリ『雲堂』をリリース。現代のライフスタイルに気軽に坐禅を取り入れられるツールとして、こちらも人気を博している。

お釈迦さまの国でMBA!? 経営学を学んだ理由

お寺カフェ、ネット寺院、お寺の音楽イベント、書籍の執筆……お坊さんになって約5年間、光明寺をベースに走り続けた松本さんは、「お寺を変える動きが同時多発的に広がればもっと面白いんじゃないか?」と考えるようになった。「お寺を変える」から「お寺の世界を変える」へと大きく視野を広げたのである。MBA留学を決意したのは、「お寺の世界を変える」ために有効だと考えたからだ。留学先にインドを選んだのは、インドという国が好きだったこと、そして2年間のプログラムを1年間で修了するハイレベルなビジネススクー

ルが見つかったからでもある。

「経営学を学ぶためだけでなく、対社会の戦闘力を高めることも目的でした。これから成長する国、お釈迦さまの国の第一線の人たちが何を考え、何を感じて生きているのかも知りたかった」。経営戦略とマーケティングを学びながら「これをお寺に活かすなら?」と考え続けていたという。

帰国後は学んだことを他のお坊さんたちと共有すべく、『未来の住職塾』の布石となる“プレセミナー”を開催。予想以上の反響を受けて、2012年春に『未来の住職塾』がスタートした。全国4会場5クラス、若手の副住職・住職を中心とした受講生の平均年齢は39歳。松本さんは、入念なテキスト作りと講義の設計、そして各会場全6回の出講に文字通り奔走する日々が始まった。

「あなたのお寺には仏教がありますか?」

『未来の住職塾』では、講義よりもグループワークが中心だ。事前にPDFなどでテキストを配布。その内容をスライドで解説し、その後は受講者同士で知恵を出し合っ、それぞれの現場を問いなおす議論が続く。授業時間は毎回5～6時間にも及ぶため、講師である松本さんも受講生も当然へとへとになる。

「仏教寺院の“商品”は何か?」「お寺のパフォーマンス・バリュー(質や機能の価値)は何で決まるのか?」。刺激的な問いかけに、つい「観光資源としての仏像」とか「イベントに使える広い境内」などと短絡的な答えを想像する人も少なくないだろう。しかし、解き方は拍子抜けするほどに仏教の中心軸に根差している。

仏教寺院のカギは“仏教”であるのだから、まず仏教を“三宝(仏法僧)”に開く。“商品”を「提供しているもの」と考えると、「お寺が提供している仏・法・僧とは何なのか?」「それはお寺でしか提供できないものなのか?」と突き詰めていくことになる。さらには、ディスカッションを促すために「あなたのお寺に仏教がありますか?」と、前提からひっくり返すこともあるそうだ。『未来の住職塾』が“本当に”目指しているのは、お坊さん自身による「自利利他」の実践なのだ。

『『未来の住職塾』に対して「寺院が金儲けをするつもりか」という話もあったけれど、お金の話はほとんどしていない」と松本さんは言



う。組織が発展するためには、経済的に成立することも重要だけれども「何のためにその組織(寺院)があるのか」を徹底的に見つめなおすことの方が重要だからだ。

松本さんが感じている一番の手ごたえは「自分自身が面白く、受講生の目が輝いていること」だ。分厚いテキスト、長時間のグループワークやディスカッション、そして課題に誰もが真剣に取り組んでおり、回を重ねるごとに受講生の意識の変化が見えるという。

実際に、『未来の住職塾』を見学した秋田さんは「テキストの内容が濃くて驚いた。受け身でいられる研修会などとは違い、参加者はつねに能動的でいなければいけない。強い問題意識がなければ続けられないし、受講生はタフだなと思った」とコメントされた。

寺院と社会の間にある溝は経営学で埋められるのか?

松本さんからの報告が終わると、山田先生から「マーケティングという言葉を活用することで、仏教寺院と社会の間にある“ギャップ”はどこまで埋まるんだろうか?」という疑問が提起された。マーケティング＝市場化という言葉の背景には、私たちの世界はあらゆる事象に値段をつけてやりとりすることでうまく回るという“超資本主義的な世界観”がある。そして、ほとんどの人がその世界観を受け入れているからこそ、NPO、病院、教育機関、寺院に対してさえも「顧客」「消費者」という関係性を取り結ぶことで、重要な機能を果たすことができるのではないかと、という言説が成り立つ。しかし、それが行き過ぎると、人が人として扱われず、部品や代替可能なものとして扱われてしまうことになる。

「そのなかで疲弊した人々は、潜在的に宗教に救いや気づきを求めているはずなのに、そのニーズに応えられていない寺院と社会の間には、深い溝があるのではないか」。

これに対して、松本さんは「これもある意味マーケティング的かもしれないが」と前置きしながら、「マーケティングという言葉を使い、経営学を前面に押し出した講座をやるのは、『これは何なんだ?』と興味を持ってもらうためと

いう側面がある」と答えられた。「住職以上に自分のお寺を知る人はいない」のだし、お寺をなんとかできるのは自分なのだと自覚を持ってもらわないと何も始まらない。「経営学やマーケティングの方法論でなら何とかできるのかもしれない」と『未来の住職塾』を受講して、「結局自分がやるしかない」と納得することには強いインパクトがありそうだ。また、実際に『未来の住職塾』では「住職は何をしなければならぬのか」が突きつけられるのである。

秋田さんは「人口減少、家族制度の崩壊によって寺院の経済基盤が揺らぐから何とかしなければならぬ」という消極的なモチベーションではなく、日本社会を変えよう、元気にしようとする“発心”に立ち位置を見いだしておられるところに非常に共感する」とコメント。そして、約20年前に新しいスタイルの寺院として應典院を再建し、世に問うてきた先輩として「孤軍奮闘で立ち上がっているイメージがある。大変だろうと思う」と、温かな目を注がれていた。

『未来の住職塾』はこれからのお寺を作る場所

山田先生によると、経営学には「いろんなフィールドに光を当ててきた歴史もある」という。「経営学の方法論で、ふだんのお寺の営みを照らし、足元をよく見る」ということを超宗派の僧侶が集う『未来の住職塾』でやる意味とは何だろうか?

社会のOS(Operation System)になっている経営学を学ぶことで「人を部品として見てしまうような経営学のモノの見方、それがこの世を動かすルールになっていることを知

り、取り込まれたと見せかけて書き替えていく。そして、仏教的な価値の上に立って渡りあう力をつけてほしい」と松本さんは考えている。さらには、「それでこそ大乘仏教僧としての仕事ができる」という思いもあるそうだ。

『未来の住職塾』は「これからのお寺を学ぶのではなく、これからのお寺を作る場所だ」と松本さんは話していた。『未来の住職塾』に参加しようという人は、「オープンに新しいものを取り入れる意欲のある人たち」である。お寺に明るい未来を作ろうとする人たちが集まり、共に学び、議論するなかで生まれるネットワークこそ『未来の住職塾』の真骨頂だ。どれだけやる気があっても、やはりひとりではものごとを動かすのは難しい。仲間がいてはじめてムーブメントが生み出されるのだ。

お寺が変われば日本が変わる

質疑応答の時間になると、矢継ぎ早に多くの質問が投げかけられ、この日のテーマ、そして松本さんへの関心の高さがうかがわれた。

質問の内容は、現時点での『未来の住職塾』の成果や経営学でお寺を考える具体例について、松本さんが話されたことをブレイクダウンして問う質問が多かった。なかには、やはり「マーケティング」「マネジメント」など、経営学の言葉で仏教やお寺を語ることへの違和感、反発を感じている僧侶の方も見受けられた。松本さんは、終始和やかに一つひとつの質問にいてねいに応えておられた。

最後のコメントで、山田先生は「松本さん、秋田さんの活動は、超資本主義に対する当

然あるべき抗体だと思う。経営学を方法として取り込んだうえで、日本人が先祖から引き継いでいる人間観に基づく価値体系を見つめ直し、再生させる運動としてご活躍いただきたい」と応援のメッセージを伝えられていた。松本さんは、自らの問題意識が社会変革にあることを明らかにしながら、そのモチベーションが「目先のことで成功しようというのではなく、子ども世代に恥ずかしくない世の中にしたい」ということにあると話された。大きなビジョンを掲げながらも、その足元が身近な暮らしや関係性にしっかり根付いている、あくまでニュートラルなバランス感覚もまた、松本さんの魅力なのだろう。

秋田さんは「15年間、應典院をやってみて、このお寺がOSになってどう地域社会が変わっていくのかを考えてきた」と振り返られた。街づくりや教育に関わることは日本のお寺の原型でもある。『未来の住職塾』が生み出すであろう「この世のルールを仏教のうえで書き替えていく」力のある新しい住職たちが、それぞれの地域から、日本を変えていく姿を見る日が楽しみである。



杉本恭子／すぎもときょうこ
1972年大阪府生。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営・ウェブサイト編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに。現在『彼岸寺』ウェブサイトにて「坊主めくり—現代名僧図鑑」と題したインタビューを連載中。
<http://higan.net/blog/bouzu/>

超宗派のバーチャル寺院による「場を開く」実践

【彼岸寺】 [\(http://higan.net/\)](http://higan.net/)



再編集する、まったく新しい場」として2004年に松本さんが仲間たちとともに開設した。話題の仏教ニュース、イベント紹介、仏教に関連する連載記事などを発信している。

【神谷町オープンテラス】 [\(http://www.komyo.net/kot/\)](http://www.komyo.net/kot/)



光明寺境内に開かれたオープンスペース。東京メトロ日比谷線 神谷町駅前から徒歩1分、オフィスビルに囲まれた立地を活かして、周辺で働く人々や

【未来の住職塾】 [\(http://www.higan.net/juku/\)](http://www.higan.net/juku/)



現代社会におけるお寺の運営と住職の役割を学ぶ超宗派の人材育成プログラム。最新の経営理論に基づいた学習により、お寺マネジメントを体系的

震災を契機とした宗教学者の変化?

協働のあり方を模索する

東日本大震災の発生からほぼ2年経った2013年3月2日、東北大学で「東日本大震災と宗教者・宗教学者」と題するパネルディスカッションが開催されました。東北大学の実践宗教学寄附講座、京都大学こころの未来研究センター、宗教者災害支援連絡会の3つが主催し、東北大学大学院文学研究科、世界宗教者平和会議(WCRP)、心の相談室が共催したものです。

1 宗教・宗派を超えた連携と宗教学者

「宗教者と宗教学者は災害とどう向き合うか」と題する山折哲雄氏の基調講演に続き、災害支援に関わってきた宗教者、宗教学者がその取り組みを報告し、意見を交わしました。

被災地である宮城県の東北大学でこのような会議が開かれたことは、まったく自然なことのようにも思えます。1995年に発生した阪神・淡路大震災にさいしても、その年の10月に「阪神大震災が宗教者に投げかけたもの」と題する国際宗教研究所主催の公開シンポジウムが京都で開催されました。10人の宗教者が被災の体験と支援活動を語り、二人の宗教学者(そのうちの一人は山折哲雄氏)がコメンテーターとなり、災害時における宗教の役割が討議されました。

ただ、このような前例と少し異なり、東日本大震災では、異なる宗教・宗派の支援者たちによる連携の推進に、宗教学者が積極的な役割を担ってきました。仙台市の斎場での弔いと遺族の悲嘆のケアから始まり、避難所・仮設住宅での移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」等へと活動を広げた「心の相談室」。その経験をふまえて東北大学に開講された「実践宗教学寄附講座」と「臨床宗教師養成。東京で月1回の情報交換会を開催し、宗教者のさまざまな支援活動をつなぐ「宗教者災害支援連絡会」。また、インターネット上で宗教者の支援活動の情報を共有する「宗教者災害救援ネットワーク」や「宗教者災害救援マップ」。先のパネルディスカッションも、そのような活動の

展開をふまえて企画されたものでした。

2 アクション・リサーチ

それは、これまで客観性・中立性を標榜してきた宗教学者が一歩踏み込んで、社会における宗教の役割の拡大にコミットしているという印象を与えます。

しかし、このたびの震災で経験したような、物心両面のさまざまな支援を必要とする現場で、それに何ら応えることもなく観察やインタビューを行い、その成果を持ち帰る、という姿勢は、客観的・中立的なようであり、たんに自己中心的なふるまいであるように思えます。将来役立つという意義があるにしても、現場の人びとの相互理解と協働が求められるはず。これは民俗学者の宮本常一が、1972年に発表した「調査地被害」という文章(宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑』みずのわ出版、2008年に再録)で指摘していた問題です。

研究を現場での当事者との協働の中に組み込んでいく実践として「アクション・リサーチ」という手法が、心理学者レヴィン(1890~1947)によって提唱され、医療・看護・福祉や教育などの分野で試みられています。

宗教学者が、災害支援における宗教の役割を、宗教者を含む現場のさまざまな当事者とともに模索しながら検討していくことも、アクション・リサーチの一つとして位置づけられるでしょう。近年「利他主義と宗教」、「宗教の社会貢献」の研究をリードしてきた大阪大学の稲場圭信氏は、そうした立場を打ち出しています。そして、宗教者へのインタビュー調査などをとおして、望ましいケアや連携・協働のあり方を探り、それを実現するための提言や新しい取り組みを行っています。

3 研究者であることによる「縁」

ここで、筆者自身について少し振り返ってみます。

筆者も稲場氏の呼びかけに賛同し、協力してきました。具体的には、宗教者災害救援ネットワークの共同管理人、宗教者災害救援マップの構築作業、宗教者災害支援連絡会の世話人などです。また同時に、被災地の神社を訪問し、被災と支援の体験をうかがうとともに、支援の連携の可能性を探ってきました。

これはもちろん震災以降の新しい動きではありますが、それ以前に、「宗教の社会貢献」を共同研究するグループのメンバーとして、現代の変動する地域社会における神社の役割に注目してきました。このグループを中心とした研究成果は『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル』(全4巻、明石書店)にまとめられています。

震災発生当初に話を戻すと、南関東にいて被害を受けることもなく、テレビやネットを通じて、現地の甚大な被害状況や、急速に深刻度を増す原発事故の状況を知るうち、自分に何ができるか、という問いが浮かんできました。

稲場氏らへの協力や、神道系大学の教員として支援の可能性を探りながら現地の神社を訪問したことなどは、東北出身者でなく南関東に住む筆者が、研究者あるいは大学教員という属性を「縁」として被災地や支援者につながり、そこでさまざまな役割を担うということにほかなりませんでした。

ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)研究では「結束型」と「橋渡し型」という分類がありますが、筆者にとってはこうした「縁」がまさに「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルとして作用したと言えそうです。

そして、この「縁」を通じて、支援に取り組む多くの宗教者の方々に会い、その取り組みの内容や姿勢に学ぶことがで

二〇一三年三月三日、宮城県山元町にて、宗教者・宗教学者共に祈る
(撮影：黒崎浩行)



きました。

4 協働とその裏側

一方、研究の公表は、災害支援における宗教の役割に対する社会の認知をもたらし、協働性・公共性を高めると言えるかもしれませんが。庭野平和財団の『宗教団体の社会貢献活動に関する調査』報告書(2012年4月実施)は、宗教団体の社会貢献活動に関する認知が震災後もいまだ低いことを記しています。こうした状況の改善を研究の積み重ねに期待する向きもあります。

ただ、それに関してとても印象的な出来事に遭いました。『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル』第4巻として、稲場氏と筆者の編著で『震災復興と宗教』を上梓したところ、葉書でその感想をいただきました。そこには、「沈黙」の重要性、「私」の慢心を離れることが記されていました。その葉書に差出人のお名前はありませんでした。

協働性・公共性を高めることも必要だけれど、なすすべもなくただ祈るほかないということをやはり大事にしたい。そんなことを示唆しているように思いました。こうした気づきをいかに共有するかということも、宗教者・宗教学者に共通する課題ではないでしょうか。

大きな時代の節目にあって、宗教学者のあり方が少し変わったようにも感じられますが、同時に変わらない問いに再び出会うということもあるのではないかと思います。

黒崎 浩行(くろさき・ひろゆき)
國學院大學神道文化学部准教授。島根県松江市出身。情報化と宗教、地域社会と神社について研究。宗教者災害支援連絡会世話人、宗教者災害救援ネットワーク共同管理人を務める。

WORKS

2012年9月から2013年2月までに起きたさまざまな動きを、レポートします。

法輪は



死者と共生するコミュニティ。 哲学者内山節が宗教を語る。

2013年9月15日、寺子屋トーク(祈り)から3.11後社会をデザインする」を開催、1部は哲学者の内山節さんの講演、2部では、内山さんに加えて、田中利典金峯山寺執行長、白波瀬達也大阪市大博士研究員、稲場圭信大阪大学准教授と私も参加して、パネル討議が展開されました。

生きている人間を優先してきた西欧社会と違い、絶えず自然と死者と交渉しながら

らコミュニティを運営してきた日本人のあり方を見つめ直し、改めて、3.11以後の祈りや願いの公益性について議論がありました。また、制度や組織にがんじがらめになった現代仏教に対し、いま一度その原点が投げかけられた場となりました。



9月15日

寺子屋トーク第64回
「<祈り>から3.11後社会をデザインする」
(ステージ左から稲場さん、田中さん、秋田住職、白波瀬さん、内山さん)



寺子屋トーク第65回
「死者が大阪を賦活する時～宗教観光都市論～」
(左が中沢さん、右が内田さん)

10月12日

内田VS中沢のビッグ対談が実現! 「霊性都市大阪」を語り合う。

10月12日、寺子屋トーク「死者が大阪を賦活する時～宗教都市観光論」は、内田樹VS中沢新一の贅沢な対談が実現。元々は内田先生単独の講演会だったのですが、「大阪アースダイバー」を上梓したばかりの中沢先生が「便乗」したもので、中身はほとんど「アースダイバー」にちなんだもの。「大阪が元気がないのは経済の問題というより霊力の弱まりが原因」と内田先生が言うと、「まさにそれを言いたくてこの本を書いた」と中沢先生が受けるといった案配でした(ほんとに本は面白い!)

看板のような観光論とはなりませんでした、それでもビッグなふたりの対談にフロアのみなさん、大満足の様子でした。

悲しみの求心力に、東北は聖地となる? 新しい「宗教観光」を考える。

宗教と観光は本来相似形のもの、その原点を探ろうと「ものがたり観光行動学会」の年次大会が、10月12・13両日應典院共催として開催されました。

学会長の白幡洋三郎日本国際文化研究センター教授の開会挨拶のあと、基調講演にはおなじみの釈徹宗先生が、聖地をテーマに迫力の講演がありました。

続いてディスカッションは佛教大学・高田公理さんをコーディネーターに、編集者の江弘毅さん、関西学院大の加藤晃規さん、漫画家のハンジリョウさんらがそれぞれ宗教と観光について語り合いました。宗教が人をひきつける力と、観光の魅力は通底していると再認識させられた学会の一日でした。



commonsフェスタ2013プレ企画
24Hトーク「如是我聞～是くの如く、聞きにけり」 12月24日～25日

24時間トークのクリスマス。 お寺は「無縁のカタリ場」となった。

ふたりの奇才がクリスマスイブから一昼夜語り続ける24時間トーク「如是我聞」を開催、12月24日の朝7時から25日の朝7時まで、劇作家の岸井大輔さんと旅プランナーの陸奥賢さんの二人が完走しました。應典院は早朝から深夜まで、40人近い人たちが議論の渦に巻き込まれていきました。

ふたりに共通するのは、大阪のフォーカスに対する知識や見識と、宗教的な

ものへの敬意と関心です。陸奥さんが、「自分はナラティブを求めて生きているんだ、と気づかされた」と言いましたが、まさに身体ごと、声と知力をふりしぼり語り続ける姿は、現代の行者のようでした。イブの夜、確かに應典院は無縁の空間でありました。

3.11以後、日本の宗教は変わるか。 宗教者と研究者の共同討議の場。

日本の宗教学の拠点である国際宗教研究所が主催する公開シンポ「3.11以後の日本社会と宗教の役割」に、金光教の渡辺順一さんと一緒にコメンテーターとして参加しました。

パネリストはカフェ・デ・モンクの金田諦應さんら4名が並び、司会に稲場圭信さん、国学院の黒崎浩行さん、さらにフロアには東大の島菌進先生らと、現代宗教の知が一堂に会しました。会場は大正大学。

とにかく発言者が多く、4時間半という長丁場でありながら、私のコメントはただの一回、ちょっと消化不良でした。その分、あとの懇親会でたっぷりお話しさせていただいた次第。

3.11以後の日本社会と宗教の役割

パネリスト
金田 諦應 (曹洞宗通達大寺)
川村 一代 (ライター/若一王子宮)
篠原 祥哲 (世界宗教者平和会議日本委員会)
林 里江子 (クリスチャン・ライフ・コミュニティ)

コメンテーター
秋田 光彦 (浄土宗大蓮寺・應典院)
渡辺 順一 (金光教羽曳野教会)

司会
稲場 圭信 (大阪大学)
黒崎 浩行 (国学院大学)

2013年2月9日(土) 13:00~17:30
大正大学東館1号館7階大会議室 (会場予約: 06-6341-1111)

第4回 (財) 国際宗教研究所 (2012年度) 研究費
主催: 国際宗教研究所

国際宗教研究所
〒545-8585 大阪市東区東1-1-1
TEL: 06-6341-1111 FAX: 06-6341-1112
E-mail: info@irg.or.jp
Web: http://www.irg.or.jp

2月9日

国際宗教研究所・宗教者災害支援連絡会共同主催
公開シンポジウム「3.11以後の日本社会と宗教の役割」

【パネリスト】
金田 諦應(曹洞宗通達大寺)
川村 一代(ライター/若一王子宮)
篠原 祥哲(世界宗教者平和会議日本委員会)
林 里江子(クリスチャン・ライフ・コミュニティ)

【コメンテーター】
秋田 光彦(浄土宗大蓮寺・應典院)
渡辺 順一(金光教羽曳野教会)

【司会】
稲場 圭信(大阪大学)
黒崎 浩行(国学院大学)

「異日常」の世界へと誘う、 アートとNPOによる総合芸術文化祭「コモンズフェスタ」。 あえて変化球で「異常」の「非常」さに向き合う。

■非日常でなく異日常へ

大阪・上町台地を拠点に着地型観光をプロデュースするオタギリサトシさん(株式会社インブリージョン代表取締役)は「非日常ではなく異日常」の演出が重要、と説いています。それは、これまでの観光の形態が発地型であったことへの問題提起です。なぜなら「観光会社」が「観光地」を訪れる企画を立てる際は、その場所に向かう側の視点が重視され、「お客様が何を求めているのかの目線で内容が組み立てられてきました。こうした出発地で組み立てた計画よりも到着地で編み上げた企画の方が「お客さん」が「主」になりやすい。そこには「日常とは全く別の世界よりも、ちょっと異なった場へ、すなわち「異日常」への誘いが重要」といいます。

▼一昨年の3.11の夜、首都圏が帰宅困難者であふれかえっている時、私はずっとツイッターで呼びかけつづけた。「今お寺の山門を開けよ」「帰宅難民をすぐ受け入れよ」。

▼ネット上で情報は錯綜していたが、あとで多くの寺が自主的に門を開いた、と知った。あの夜、寺の住職や寺族、職員たちは、まさか自分たちが帰路に迷った人々の世話をするなど想像だにしていなかったことだろう。しかし、たった一夜の判断は、その後の宗教の意味を大きく変えることになる。

▼6月4日付の中外日報に、震災後、自治体と宗教施設の災害協定、協力の調査結果が出ていた(阪大稲場圭信准教授)。すでに全国に43自治体、223の宗教施設が緊急の場合の協定を結んでいる。協定には至らないが、協力関係にあると答えた自治体は、全国に60、宗教施設は438に上る。驚くべき数字だ。

▼協定の内容は、避難所、応援機関の活動拠点、帰宅困難者の一時滞在、遺体安置所…まで、多岐にわたる。その背景には、このたびの東日本大震災で、多くの宗教施設が避難所として活用された(100ヶ所)「実績」があることは言うまでもない。宗教施設はすでに地域の安全のインフラなのだ。

▼万が一の救援活動の時だけではない。宗教施設がそのように施設活用されるのは、協定があるからではなく、あくまで平常時の関係の延長線上になくならない。

▼むろん、宗教はNGOと同じではない。分ち難く地域と密着した寺院のような存在が、どのように真価を発揮できるのか。施設の機能以上に、緊急時に際し、宗教者(住職や寺族、あるいは檀信徒ら)がいかににはたらき、どのようなことばを用いたか、その全人格的なありかたがもっと問われると思う。

▼檀信徒対象の布教や教化もあっていい。ただ宗教者が「公共的に」地域とながるとはどういうことか、どの宗門も学習の術を持たない。そこをどうもっと論議したり、研究していくべきではないか。

(彦)

はないでしょうか。実際、1997年の再建以来、應徳院では年間を通じて各種の催しが行われてきました。鉄とガラスとコンクリートによる「見ると無機質な施設と思われる場合もあるかもしれませんが、時代と共に振る呼吸するお寺」となるよう、多くの方々に活動の拠点として開いてきています。そうした場の担い手の人として、お寺に事務所を構える應徳院寺町倶楽部もあり、再建の翌年、1998年から毎年1回「コモンズフェスタ」と呼ばれるアートとNPOの文化祭を開催してきています。

▼「コモンズフェスタ」は毎年統一テーマが掲げられています。例えば、2011年度は東日本大震災から1年を迎えるにあたり「記憶を巡る旅」とつけられていました。そこで2012年はとんちで「越境」をテーマに、今、この時代を生き抜くためには答えを探る「問い」を掘り下げる「必要」がある、と考へてのことです。そうして1月10日から24日まで、15日にわたり、21の催しが実施されました。

■変化球で攻め込んでいく場

なぜ、「コモンズフェスタ」がアートとNPOの文化祭になるのか。それは両者が言わば「異日常」へ誘う重要な手がかりを提供するためです。なぜならアートもNPOも、人々の価値観、転じて思い込みを説く視点を提供します。そもそも、初年度の「コモンズフェスタ」が「写真展」から始まったこと、さらにその

企画を有志のメンバーによって具体化されたことを思えば、「コモンズフェスタ」はあるいは應徳院はその源流にアートとNPOの欠かさない関わりがあったのです。今年はその原点に立ち返り、場の企画と運営の担い手となる実行委員を組織化して「とんち」で「異日常」への「越境」を誘うことにいたしました。

多彩な実行委員の中でも、福島県いわき市から東淀川区で避難生活を送っている遠藤雅彦さん(避難所関西外避難者の会、福島フォーラム代表)の存在は、今回の「コモンズフェスタ」を通じて投げかける問いの深さを明らかにするものでした。実際、遠藤さんは、開幕前の語り合いの場面で「伝えたいことが重いとときには、ストレートな表現では逆に伝わらない」と仰っています。見えない「放射線被害」に苦しむまちの「異常」とも言える世界の顕在化に取り組んだ、2013年の「コモンズフェスタ」……。異日常の場で問答を重ねた15日間の余韻が、今も應徳院を包んでいます。

(山口洋典)

サリュ・スピリチュアルvol.7
2013年6月30日発行

編集長: 秋田光彦
編集: 山口洋典
写真: 山口洋典

発行: 大蓮寺・應徳院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
Email info@outenin.com
URL http://www.outenin.com

